

# 聞き合う子どもたちがつくる協同的な学び

～「書くこと」で深まる対象・自己との対話・「聞く視点」をもつことで深める自己・他者との対話～

中田 郁子

学びの質は、子どもたちが主体となっていく意見交流の中で高まると考える。そこで、ただ「友達の考えをよく聞きましょう。」ではなく、子どもたちに他者の考えを「聞く視点」をもたせることにした。

本研究では、子どもたちが、教材文『じどう車くらべ』を「自分ならどう書くか」という視点で読み深められるように単元を組んだ。また、書くことを通して、対象・自己と対話し、ペアトークを通して、他者との対話し、全体での交流で、学びを深められるようにした。

キーワード：協同的な学び、聞く視点、『じどう車くらべ』、書くこと、ペアトーク、他者・自己・対象との対話

## 1. 聞き合える子どもたちに

### 1. 1. 友だちの思いを知りたがる子

友だちの考えの根拠を聴きたがる子を育てたい。

友だちの思いをより正確に捉えたいからこそ、「どうしてそう考えたの？」と身を乗り出して聴いていく子や、対象について、もっと知りたいと進んで調べようとする子を育てたいと考えた。

自分の考えをもって、そこで満足するのではなく、「友だちと一緒に学ぶからこそ一層おもしろい」という感覚をもてるような学級を創っていこうと以下のような取り組みを行ってきた。

### 1. 2. 聞く視点

「友達の考えをよく聞きましょう。」ではなく、子どもたちに他者の考えを「聞く視点」をもたせることにした。

それは、自分たちのペアトークに名前をつけるようにすることである。二人が同じ発見をしていれば「にこにこペア」、二人が異なる発見をしていれば「もりもりペア」、二人で更に新しい発見を見つけることができれば「きらきらペア」とした。このような「聞く視点」があれば、自分と友だちとの考えは同じなのか、違うのかと考えながら聞くことができる。

このように、子どもたちが「聞く視点」をもつことによって、協同的な学びが実現し、質の高い学びを創造していけるようにした。

### 1. 3. よりよい聞き手を育てる

特に、朝のニュースコーナーを用いて、安心して

話せる学級づくりを目指した。友だちの発表を聞いて、まだ分からないことがあったり、興味をもったことがあったりした時には、「もう少し詳しく話してください。」という言葉を使うことを共通理解にした。また、友だちの話の中から「～って言っていたけど、それは、何ですか。」や、「〇〇は、どれくらいの大きさでしたか。」など、具体的に言葉を挙げて聞いていた子を具体的に褒めながら、聞き手を育てた。それと同時に、伝えたいことをまとめて話せた子の話し方も褒めることで、話者も育てるようにした。

子どもたちは、友だちが質問してくれることで、興味をもって聞いてもらったうれしさや、伝えようとするのが、相手に伝わる喜びを感じることができている。

### 1. 4. 相互評価を通して

毎日の家庭学習に音読を出している。保護者の方にも協力して頂き、子どもたちの自己評価に繋がるようにしている。

また、授業の中で音読をした後には、友だちから評価をもらえるようにしている。「〇〇さんが、『まっしろい』という言葉、声を高くして読んでいたから、本当に真っ白なのだなと思いました。」など、友だちの音読を評価できるようにしている。どの言葉を、どういうふうに読んでいたから、よかったという具体的な評価ができるようにしている。

このような相互評価を取り入れることで、子どもたちは、進んで音読を練習するようになり、家庭でも褒められ、いっそう上手く読めるようになっている。

## 2. 「書く」ことを通して「読む力」をつける

### 2. 1. 書くことが好きな子を育てる

書くことにより、自分と向き合うことができる。また、書くことにより、自分の考えが整理され、よりよく伝えることができる。だからこそ、書くことが好きな子を育てたい。「書くことって楽しいな」という感覚を1年生の時にもてるように、よさを具体的に評価していく。

学級通信に、「みてみてきてい」ノートに書いてきた子どもたちの日記を載せている。また、授業を通して気づいたことを書いたノートの文章も載せている。子どもたちは、自分が書いた文章がお便りに載ることで、書くことの励みにもしている。

また、通信では、よく観察して書いた言葉や、気持ちの変容を言葉にしている文章を褒めている。



図1：ペアトークの様子。ワークシートに書いた自分の考えを指し示しながら話す。

## 2. 「自分ならどう書くか」を考えて読む

子どもたちは、1・2学期の「くちばし」「みいつけた」の学習を通して、文には、「おたずねの文」や「答えの文」があること、そして「答えの文を詳しくする文」があることを発見してきた。

そこで、そんな子どもたちに、文の順序やつながりを考えながら読むと、より書かれている内容が分かりやすいのだという実感をもたせたかった。そのような「読み方を知っている」ことは、文章を理解する時の強みとなる。それに加え、自分の経験と照らし合わせながら「主体的に読む」という読み方をすれば、さらに読むことが楽しくなってくる。

また、「自分ならどう書くか」と意識しながら読めば、より「主体的に読む」ことができる。

そこで、「じどう車くらべ」を、子どもたちが、「はたらくじどう車ずかん」を作るために読んでいけるような単元とした。書くことを通して、子どもたちは、教材文の構成に気づき、文の順序や、文と文のつながりを考えながら、書かれている内容を読みとる力をつけていくと考えた。

「じどう車くらべ」の特徴は、「それぞれのじどう車は、どんなしごとをしていますか。そのために、どんなつくりになっていますか。」と、2つの問いに対して、2つの答えを、接続詞「そのために」を介して順序よく書いている。そこで、教材文の「書かれ方」を確認

した後、自分で自動車の説明文を書いていくのだが、みんなで見学にいった消防署の車(救急車・はしご車・消防車・レスキュー車)を挙げてみんなで文章を吟味した。

ここでは、自分で書いたからもう満足するというのではなく、友だちの思いや考えに耳をそばだて、「うんうん、同じだ。」「なるほど、そうか。」「少しちがうな。どうしてかな。」などと、自分の考えと比べながら聞き、「友だちと一緒に勉強するって楽しいな」という感覚をもてる学習活動にした。



図2：共通理解を図るため消防署に見学

## 3. 「じどう車くらべ」学びの実際

### 3. 1. 子どもの気づきを生かして

本時は、前時に子どもたちが書いた文章の中で、1人の子どもの文を取り上げ(図3)、その文の良さや、よりよくなる所を見つけることを通して、「しごと」と「つくり」のつながりについて考えた。

ポンプ車は、かじのときにはたらくじどう車です。

ポンプ車は、20メートルホースがのびます。サイレンをならしながら、かじのいえへいきます。

図3：児童の「はたらくじどう車ずかん」より

そこで、「どうして、ポンプ車には、サイレンがついているのかな。」と問うことにより、子どもたちは、「つくり」から「しごと」を読み、この「つくり(目に見える物)」があるのは、こんな仕事をするためにあるの

だ。」と、言葉と言葉、文と文に一層注目しながら文章を読むことができると考えた。

ペアでの気づきを全体の場で交流した後に、自分の文章を読み直し、改めていいと思える所を発見したり、次から書くときに生かしたいことを書いたりすることで、1時間の学びを実感できるようにしたいと考えた。

本時の記録を挙げる前に、導入時にも子どもたちの聞き合う活動から、学びが深まった場面があったため、先に導入時の授業記録を以下に示す。

### 3. 2. 「じどう車くらべ」導入の場面

C23：じょうよう車ってなんですか。

T：同じこと思っていた人はいますか。

半数の子どもたちが手を挙げた。

T：C23さんたちのはてなに、答えられる人はいますか。

C18：ドライブにつかう車です。

C13：レンタカーしていますよね。そこでかりる車です。

C20：ふつうの車です。家にあるじどう車です。

C23（首をかしげながら）いつ、なにをするときにつかうの。

C15：みんなが、とおいところに行くときにのるものです。

T：C23さんのように、みんなにたずねると分かってくるね。

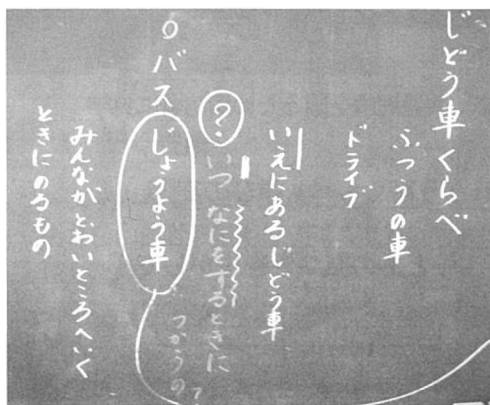


図4：導入時の板書

### 3. 3. 「じどう車くらべ」授業場面より

C25：C7くんと似ていて、サイレンを鳴らしながら火事の家に行きます。

C24：わたしは、ちょっと付け足したらいいと思う所なんだけど、『ポンプ車のホースの長さ』って付け足したらいいと思う。

(C：なるほど。)

T：もう少し聞こう。

C15：「C20さんの火事の時に働く自動車です」の自動車を消防車にしたほうがいいと思う。

T：先生からも、みんなに聞いてもいいかな。なんで、サイレン鳴らしながら走るのかな。

C3：火事の合図

C25：C3くんの火事の合図って言葉もあるけど、前、消防署へ行った時に、消防署の人が、千何リットルも水があっても5分ぐらいでなくなるって、言ってたから、消防車を何台もおびき寄せていると思う。

C13：例えば、ぼくの海南市だと他の警察署のパトカーとかを集めるってことかな。

C7：多分なんだけど、前、車で走っていたら、パトカーが来てサイレンを鳴らしながら来たら、他の車が右や左に寄ったから、消防車もサイレンを鳴らしたら、みんな車を、右や左に寄るんだと思います。

C8：うちの車もよったことある。

T：何で寄るのか知っているかな。

C22：サイレンがなかったら、C8ちゃんに似ていて、どいてくれないし、鳴らしてないと、分からないから。赤でも行けるから、どいてくれて、よく分かるからサイレンを鳴らすんだと思います。

T：よく分かるから。

C8：なんで右と左に寄るかという、急いでいる消防車とぶつかってしまうから。

C24：C8さんと似ていて、急いでいるからサイレンを鳴らしたりして、急いでいるから信号を無視できる。

C19：C24さんと似ていて、火事のところでいた人をすぐ助けないといけないから、信号とか関係なく真っ直ぐ行く。

T：C26さんが、言っていたけど、つながってきたって言ってね。読んでいる人が『さすが』って思うの、あと一つ言葉があったらいいのっていうの、いいかな。「だからサイレンを鳴らすんだよ。」ってC12さんが、前に言っていたね。

C3：ずっと前に、救急車が、逆の方を走ってた。

T：急ぐためにサイレンがあるやね。そんなポンプ車の仕事を書いたら『さすが図鑑』になるかな。最後に、ぼくだったら、私だったら、こんなに書くよ、今日は勉強して思ったことや、分かったこと、分からなかったことを書いてください。

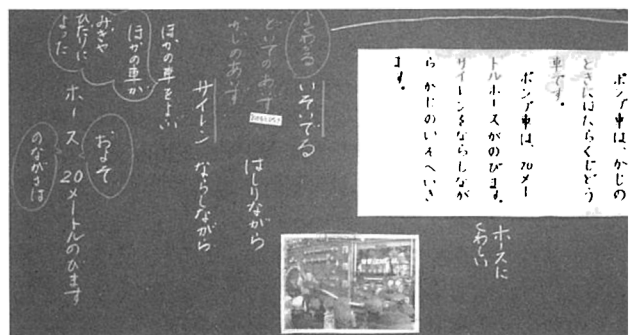


図5：本時の板書

## 4. 授業の考察

### 4. 1. 導入時の考察

教材文と初めて出会った子どもたちの思いや考えを、吸い上げるように努めた。子どもたちが意見を交流する中で、「いつ、何をやる時に使われる車なのか」ということに焦点化されていった。これが、C23が知りたかった「乗用車とはどんな車なのか」ということだった。

そもそも、「じどう車くらべ」という説明的文章が、それぞれの自動車の仕事をいつ、どんな時に働き、そのために、どんなつくりになっているかを書いた文章であるのだから、C23の指摘は、素晴らしかった。

子どもたちが、自分の体験を交流するなかで、C20の「普通の車」という表現がでた。普通の車とはいったい何なのか、その普通の車を乗用車と呼んでいるのなら、いったいどんな働きをしているのか、これが意外に難しいところである。バスやトラックは比較的分かりやすい仕事をしている。

C23のような素朴な疑問を大いに歓迎することによって、学びが深まることを共有し、立ち止まって、意味を確かめる大事さを伝えた。



図6：ペアトークの様子

### 4. 2. 授業場面の考察

子どもたち一人ひとりが、自分の経験を話すことで、どうしてポンプ車にはサイレンがあるのかを子どもたちの力で導き出した。しかしながら、意図していた「そのために」という言葉の働きに改めて注目することはできなかった。

授業の前半からサイレンという機能に焦点化していれば、「そのために」という言葉に着目しながら、文と文をつなげて読むことができただろう。

C7の発言からC8の「うちの車もよったことある。」から、経験を紡ぎながら、C22の「サイレンがなかったら、どいてくれない、よく分かるからサイレンを鳴らすんだと思います。」という発表に繋がり、C19の「C24さんと似ていて、火事のところにいた人をすぐ助けられないといけないから、信号とか関係なく真っ直ぐ行く。」という発表に繋がった。本来ここからが、

文と文を繋ぐ「そのために」という言葉の機能を学ぶ場面であったのだろう。急いで火事の現場にたどりつく「そのために」サイレンがついている。このように、文と文をつなげる言葉の機能を、学級全体で納得できるところまで話し合えるには、子どもたちのみとをしつかりとし、課題の焦点化を図るべきであった。

## 5. 成果と課題

本学級では、授業中に「自分の考えを書きたいな。」「書いたことを、ペアトークしたいな。」「勉強の種、見つけたよ。」というつぶやきが、子どもたちから出る。これは、対象との対話を「書くこと」を通して深めていることを子ども自身が自覚した発言であると考えられる。

また、子どもたちの中には、自問自答しながら、より質の高い学習課題を見つけることができている子もいる。発見したことを人に伝えたい時、子どもの目は輝く。そのような目の輝きを見ることができた時、聞き合う学級をつくることのできたのではないかと思う。

子どもたちは、書く活動を通じて、自己と対話し、聞いてもらえる安心感をもって学習に取り組むことができているといえるだろう。

今後は、学級全員が自分の経験を生かして話せるような課題を設定しながら、それらを共有できるように、学習の入り口、つまり課題設定のあり方を考えたい。

また、引き続き、安心して声を発することができる対等な人間関係がある学級づくりを心がけていきたい。豊かな学びが存在する空間は、対等な人間関係が必要不可欠である。つまり、互いによさを認め合いながら、共にのびゆく仲間であることの意識をもった学級を創っていくことが学びの質を高めることになるだろう。



図7：ペアトーク後に全体の場で発表する様子

### 参考文献

「豊かな言語活動が拓く 国語単元学習の創造 Ⅲ小学校低学年編」 日本国語教育学会 東洋館出版社  
「小学校国語科学習指導の研究 26 話し合い・聞き合い・学び合い」 石田佐久馬 編 東洋館出版社  
「豊かなことば育ちが心と学力の基礎」

村山 士郎 著 本の泉社